

平成20年度後学期 学生による授業評価アンケート調査（最終）
「アンケート結果に応じて」

所属部局	人文学部		氏名	安永 愛	
講義コード	2332033010		講義名	フランス文学概論	
開講曜日	月曜日	5・6時限	専門科目		
授業回数	28回	休講回数	1回	補講回数	0回
				受講登録者数	6人
成績評価に際し注意した事項					
出席状況、年間2回のレポートにより総合的に判断した。					
報告内容					
<p>小人数の授業であり、授業の満足度は、全体に高い印象である。4つの項目を除き、満足率は100%となっている。満足率が低かったのは板書の項目（60%）、学生の反応を確かめながら講義をしていた（80%）、学生の質問・相談に応じる姿勢があった（80%）、授業の進度が適切である（80%）の各項目である。</p> <p>一部に発表や音読を課したが、基本的に講義形式の授業であったので、一方方向になりがちなことを心配していた。その点についての不満はないわけではなかったと思われるが、知識を吸収する授業として位置づけて聴いてくれたために、満足度は高かったものと思われる。</p> <p>板書については、他の授業でも満足度が低めに出る傾向があり、これは、心しなければと思う。板書は補助的な位置づけと考えているが、大きくはっきり書くことをこころがけたいものである。</p> <p>また、集計表を見ると、A+評価より、A評価が多くみられる。これは、一応満足だが、とびきりのものに欠ける、という評価と考えてもいいのだろう。「フランス文学概論」という大きな題目を掲げた科目であるので、教員の努力・研鑽に切りはない。ある作家、ある作品について、本質を捉えた解説をこころがけたい。作曲家でピアニストである野平一郎氏の楽曲アナリーゼを聴講したことがあるが、一つのフレーズ、一つの音調に作曲家の特性と様式上の特徴を読み込み、大きな歴史の流れの中に位置づける氏の語りは非常に説得力があった。無論、氏の創作者、演奏者としての膨大な経験の蓄積あつてのことであろう。私は、「フランス文学」を対象として、同様の仕事—すなわち、一つのフレーズ、一つの語法に作家の特質を読み、文学史の流れの中に位置づけること—を目指したいものだと思っている。</p>					

